「戸隠百首」 久山百首
越志百首

はじめに

戸隠中社の久山家（旧勧修院）の玄関に掲げられている額装の「戸隠百首」は、戸隠山顕光寺の最後の別当にして戸隠神社最初の神主であった久山理安氏によるもので、末尾に明治廿二年六月の日付がある。歌材は戸隠の特定の場所に関わるものが六十八首に及び、あたかも戸隠名所案内であるかの趣がある。花鳥風月に関わる歌も多くみられ、当時の神事を推測させる歌もある。ただ残念ながら一部汚損がみられ、時に無理な修復と思われる箇所もある。

一方で、宝光社の越志家（旧廣善院）にも初代の越志五十鈴氏の跡を次ぐ二代目・秀造氏による同様の百首が残されている。数首単位で久山百首とは掲載順序の異同もあるが、題名は表記の異なりなどわずかな字を除いて一致する。一つの歌題に数首書かれているものもあるので未定稿と思われるが、冊子形式で汚損はない。

久山百首と越志百首という二種の百首があるということは、おそらくは歌題を定め戸隠の和歌愛好家がそれぞれに作歌したと思われ、未発見の戸隠百首がある可能性もある。

ここに、額装の久山百首を、冊子形式の越志百首で補う形で、戸隠百首を紹介する。

なお、百首とはいうが、実際は百一首である。

●は、汚損によって読めない文字（文字数不明の場合もある）

□は、形はしっかりしているが、読めない文字

振り仮名・濁点はすべて編者による

歌題上の数字は編者が整理のために付した

末尾に分かる範囲で歌題の場所を地図におとしたものを掲げた。作成に当たっては戸隠中社の喫茶ランプの主人・高橋氏の教示によるところが大である。

戸隠百首　　七十二翁久山源理安

1　　高妻山の神鏡

四方八面（よもやも）の峯を見おろす高妻の山をみ空にうつす神鏡

四方八方の峯を見下ろす高妻の山を、さらに高い空に映し出している神鏡であることだ

「うつす神鏡」を、高妻山が鏡に写っているのではなく、高妻山を鏡が空に映し出している、の意ととる。

「神鏡」は、文久二年（一八六二年）に高妻山に仏心という者が入峯して頂上に直径六三センチ、重さ四〇キロかとも思われる青銅鏡を安置したもの。台に「高皇産

霊阿弥陀如来」と刻されている。

高妻山は裏山十三仏の内の十阿弥陀であり、乗因の『戸隠山大権現縁起』によれば、高妻明神は高皇産霊神（たかみむすびのかみ）で本地は無量寿（阿弥陀）ということになっていて、台の刻字とも符号している。明治に神社になってから一時、十三仏を『古事記』や『日本書紀』の神々に当てることが行われ、『裏山参詣案内記』によれば、高妻山頂は第十の祠・高妻社とされ、祭神は高皇産霊命である。現在は、十三仏の呼び方が主で神々に当てる習慣はみられない。

また、奥社鳥居と随神門の中程右側に「高妻山神鏡」（慶応二年・1866 年に大沢講建立）の碑がある。正面に三行の文字があり、左に「大澤通苅分」、中央に「大澤講々長武津信」、右に「高妻山神鏡」とある。大沢講は講長武津信で現富岡家の講。慶応元年（1865 年）に大澤通苅分が開通した折の記念碑とみられる。「苅分」は草木を刈って造った苅分道のことで、高妻山に登るには、現在は大洞沢を一不動まで登り、尾根伝いに五地蔵などを経て高妻山に至る道が利用されているが、一不動をそのまま反対側の裾花川源流の方に下りて行き、再び高妻山に登っていく道を、現在は廃道になっているが大澤通という。なお、『信濃奇勝録』に「六月朔日より導者に随て登る沢通と云ハ行程二十里余故に山中に二夜三夜を明す」とある。この沢通は大沢通と思われる。

なお、宝光社前原の地蔵堂前に蘭喬の句碑「声無九亭（なくて）大念仏や苔の露」があるが、『中部四箇村に於ける金石文』に「戸隠村、宝光社前原ニアリ。里人ノ口碑ニヨレバ、戸隠山高妻山、大沢通ノ登山道ヲ刈明ケタルハ此句碑ノ俳人ナリシト、此人高妻山ノ曼荼羅岩ニ面シ只管念仏ヲ黙誦シ、一念凝ツテ遂ニ其絶壁ニ道ヲ通ジタリト、此句碑ハ其徳ヲ頌シテ元治ノ初メニ奥社附近ニ建テタルモノ、明治ノ初宝光社ノ人徳武源七良ナル人、其倒レタルヲ貰ヒ受ケ、此所ニ運ビ後宝光社組ノ人々コヽニ建テタルナリト」とある。「大沢通ノ登山道ヲ刈明ケタルハ此句碑ノ俳人ナリ」はさらに確認調査する必要がある。

2　　乙妻山の投の松

乙妻の山松ヵ枝（え）は神産霊（かむむすひ）のいのちをからむ手縄（てなわ）也けり

乙妻の山の松の枝は、神産霊尊（かむむすひのみこと）が、われわれの命を絡めて崖から落ちないように守ってくれる手縄のようなものであることよ

「神産霊のいのちをからむ」の「の」は主格を表す助詞とした。「からむ」は他動詞。「手縄」は乗り手が手にとって馬を操つる手綱（たづな）とも読めるが、表記通りに口取りの者が馬を引く手縄（てなわ）の譬えとする。口取りが神産霊神であり、

入山者の命が馬というイメージである。鵜飼いの綱も「手縄」という。鵜匠が神産霊神であり、鵜飼いの綱が投の松で、鵜が入山者の命。

地元でいう乙妻山は、現在の国土地理院の地図と異なり、地図上の高妻山と乙妻山の間、2297 メートルのピークを指し、古文献上の乙妻山もこれを指すと考えられる。この元乙妻山は、十三仏でいえば十一阿閦であるが、明治の神仏分離で顕光寺が戸隠神社となってから、「十一之祠一座産霊神　号乙妻社」（『裏山参詣案内記』）といわれたことがある。また、『長野県町村誌』には「乙妻は神産霊神の石祠在り」とある。神産霊は『古事記』では「神産巣日神（かむむすひのかみ）」、『日本書紀』では「神皇産霊尊（かむみむすひのみこと）」だが、戸隠では「神産霊」の表記が一般的であり、乙妻山に祭られていることになる。「神」が「かみ」で、「産」は「む」または「むす」、「霊」は「ひ」だが、「かみむひの」と五音ではなく、「かみむすひの」と六音になり、その上で、「かむ」は「かん」であるからこれを一音として「か（ん）むすびの」と読むべきか。

「投の松」は『信濃奇勝録』に五葉の這松のことだといい（「山中になきの松万年くさというものあり　なぎの松五葉の這松を云万年草（まんねんぐさ）杪苔のことくして枯乾（こかん）に及ふといへとも水中にひたせバ生かへる高野山奥の院にも有よし」）、さらには生えている場所の長さから「七里松」ともいっている（「七里松といふハ四十丁余牛馬の背の如し左右の谷より五葉の延（はい）松しけりて枝は藤蔓の如く根をなく末（うら）もなし七峯七谷に茂延（はびこる）といふ」）。『戸隠山案内記』でも七里松は、「なきの松」と同じとある。

『善光寺道名所図会』には、建暦二年（1212 年）に親鸞が両界山に登ったことを記して「既に奥の院より両界山まで七里の道峨々たる岳なれバ、召も習ハぬ御草鞋に、竹の杖を力とし、投の松をつたひつゝ」とある。親鸞が登ったかどうかの真偽は別として、そのように険しい所とされていた。『信濃奇勝録』にも「此釼が峯と云ハ群山（むらやま）の中にも秀て雲の上に真壁（まかべ）なす峯なれハ遠方迄（をちかた）も見え渡るといへとも足戦（をのゝ）き目くるめき消るはかりにて見もやられず岩に取りつき這（はい）松にすがり匍匐（はらばい）て下りて百丈の滝あり」とある。まさに投げの松にすがって命を守って通ることになる。

この「七里松」ともいわれる「投の松」は広く分布していることになるが、高妻山と元乙妻山（2297 メートルのピーク）の間は後述するように「釼の峯」といわれた断崖続きであるので、乙妻山の投の松を取り立てて「いのちをからむ手縄（てなわ）」と表現したのであろう。『善光寺道名所図会』の絵図に最奥部に「投の松」の位置を記したものがあるが、この図は乙妻山が高妻山の手前にあるようにも見えて怪しい。

この投の松についてはいとろいろなことが言われていた。『戸隠山大権現縁起』では「梛（ナギ）ノ松」という。「梛（ナギ）」はマキ科の常緑高木だから、「枝は藤蔓の如く」ともいわれる投げの松は、梛そのものではないだろう。『裏山参詣案内記』には「一名難解杰（なんげのまつ）」

というとある。「難解（なんげ）」が「なげ」になったというのであろう。「難解」とは根元が分からないことと云うが一つの解釈と受け取る。

また、『善光寺道名所図会』には、「登山の輩ハ此葉を採て帰る、難産并歯の痛等に功能著しと也」とあるので難産、歯痛の薬として知られていたことにもなる。『戸隠山大権現縁起』には「戸隠山之梛（ナギ）ノ松手ニ執レバ来世ニテ親ニ値（アウ）ト云モ、一度高妻両界山之因縁を結（ムスブ）者ハ三悪四趣之苦を脱（マヌガ）レテ人中天上ニ生て世間之楽を受（ウケ）」とある。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世、といって親子が死後にあの世で会うことは保証されていないが、「戸隠山之梛（ナギ）ノ松手ニ執レバ来世ニテ親ニ値（アウ）」というのである。この言い伝えは、上高井郡の盆踊り歌に「戸隠山のなぎの松手にとれば、来世の親にあふとも」とあるのにも残っている（『上高井郡誌』大正三年）が、親に会うとか、投げの松が難産、歯痛に効くという話は現在は地元には伝わっていない。

3　　両界岩の山彦

そぎ立る巌（いわお）の陰陽（めお）のかたらひをよそにもらしそ山彦の声

遠く離れて壁のように立っている、夫婦のような巌の睦言を他所に漏らしてはならないぞ、山彦の声よ

「そき立る」は「退き立つ」で、遠く離れて壁のように立つこと。

「陰陽」は、『日本書紀』に伊弉諾尊を「陽神（をかみ）」といい、伊弉冉尊を「陰神（めかみ）」という。また「是に陰陽（めを）始めて遘合（みとのまぐはひ）し夫婦（いもせ）と為りたまふ。」とある。

古文献に両界岩という名称は見つからないが、越志百首に「しら雪の八重たつ嶺の曼荼羅岩ふし拝む声の響く山彦」とあるので、『信濃奇勝録』（一八三四年）に「大日巌（がん）ハ曼荼羅岩とも云五丈ばかり裏に方八尺の白石鏡（はくせききやう）あり表ハ紛壁（しろかべ）の如し両界の曼荼羅をあらハす故に両界山といふ」とある曼荼羅岩と同じであろう。古くは『顕光寺流記並序』に「其峯有五丈白石、面如粉壁、顕両界曼荼羅、故両界山云」とあり、戸隠は両界曼荼羅を顕す五丈の白石を有する両界山とされてきた。

ただ、現実のどの山を両界山とみなすかにはぶれがある。『善光寺道名所図会』は「乙妻山・高妻山是を剱の岑といふ、又両界山とも称す」といい、この場合は乙妻山と高妻山とを指すことになる。『戸隠神社御境内並付近図』では高妻、乙妻の西に両界山があることになっている。両界岩は、国土地理院の地図でいうと、2318㍍の現在の地図上の乙妻山頂から南西の2261㍍のピークまで南側がほぼ垂直の崖で、山頂とピークの下にそれぞれ目立つ岩壁があり、これが胎蔵界と金剛界の両界曼荼羅に見立てられたと思われ、乙妻山に続く西のこの付近を両界山というのもうなずける。

さらには、戸隠信仰の場として、顕光寺を中心とした広い地域を両界山ということもあるので、両界山を固定してとらえる必要はないだろう。

明治の神仏分離以後は両界曼荼羅の見立ては敬遠される。

この歌では曼荼羅岩を両界岩と称し、伊弉諾、伊邪那美の夫婦（陰陽）に見立てていると思われる。この「両界岩」には仏教的な匂いが残っているようにも見えるが、地元の人には乙妻山から裾花川源流に下る尾根を戸隠と鬼無里の境という意味で両界尾根などという者もいるので、境にある岩というだけの意味を籠めたのかも知れない。

4　　礼拝石の昔し語

常世なる神のみ座(ま)しはかはらねど昔のことゝ人は語りぬ

永遠である神のいらっしゃる場は変わることがないが、いまはもう昔のことゝして人々は語っているのだ

「礼拝石」は『善光寺道名所図会』に「〇礼盤石大日の側にあり、虚空蔵までハ行難し、此所にて谷を隔て、八尺の円鏡曼荼羅岩を拝む、礼盤石にて行止りなり、」とある「礼盤石」のこと。「礼盤石」は仏語であるので「礼拝石」としたのであろう。かっては両界曼荼羅（曼荼羅岩）をここから拝んだが、神社となってからは、伊弉諾、伊邪那美の夫婦神の居られる所に見立てた両界岩を礼拝することになる。

『善光寺道名所図会』にいう「虚空蔵」は、十三仏の内の十三虚空蔵であり、現在の地図上の乙妻山であるので、行き止まりの礼盤石は行き難い現在の乙妻山の手前、かつ「大日の側(かたわら)にあり」の「大日」は、十三仏の内の十二大日如来で、現在の乙妻山と元の乙妻山との間である。また、古文献で小池といわれ、現存する小さな池の近くとなっているので場所はほぼ特定できるが、礼拝石そのものは定かではなく、大日の遺物も今は見あたらない。

『戸隠神社御境内並付近図』では元の乙妻山の先に「礼拝石」とあり、これも場所が符合する。

5　　地獄谷の倒臨

梢(こずえ)のみ千尋(ちひろ)の下(した)に見ゆれどもものおそろしき谷のそこかな

梢だけが千尋の下に見えるけれども、やはりもの恐ろしい谷の底であるなあ

梢は、普通は見上げるものだが、ここ地獄谷では下にあって「見下げる」から「倒臨」といったか。

『裏山参詣案内記』には「高妻の峯より乙妻の峯に渉る中間に俗に地獄谷と云ひ亦無間谷と云ふ所なり（中略）その所乃絶壁数千丈にして谷底闇く巌上はづかに馬乃背斗なる所手草を取りて歩み或は匍匐つゝ渉る険路にしあれば若し一足も踏誤たば千尋乃巌下に落て身體如粉成て命も失ぬれば其を譬て地獄谷となも云ふ」とあり、『奇窟怪岳』でもこの辺りを地獄谷という。『戸隠神社御境内並付近図』に大富祠（五地蔵）の南に地獄谷が、乙妻祠（元乙妻山頂）の南に大地獄谷があるいうが、乙妻祠の南の大地獄谷がここにいう地獄谷か。

6　返照の狭霧

立登る谷の狭霧に日の御形我が願そひて移る奇しさ

立ち登る谷の狭霧に、太陽の御形が現れる。私の願が添って写る不思議さよ

「返照」は光が照りかえすこと。特に、夕ばえ。「雰」は霧。「移る」は「写る」。「御形」は敬語だが、語数を合わせて「かたち」と読む。

全体として『信濃奇勝録』に「大日の礼磐と云所へ上りて謁づ常に山気立こめて靄ふかし朝日夕日にハ五色の雲虹の如く山中金色の光有」とある情景に似ている。『裏山参詣案内記』には、御来迎というのは無稽で「日神の御精を拝と云うべし」と神道的解釈をしているが、この歌の「日の御形」もそれにあたる。

場所は『信濃奇勝録』に「大日の礼磐」とあるので、「4　礼拝石の昔し語」の礼拝石と同じ場所である。

7　奇鳥の鳴声

世の中に見なれぬとりの鳴声は人こぬ峯にひとくといふらん

世の中に見なれない鳥の鳴く声は、人が来ない峯で「人が来る」というのだろう

鴬は「ひとく」と鳴くとされ、古名にもなっている（古今集「むめの花みにこそきつれ鴬のひとくひとくと厭ひしもをる」）。ただし、鴬は見慣れていて「奇鳥」というのは合点がいかない。

8　大門澤の夏後の雪

高妻の峰に向へる門澤の雪は幾夏消残るらむ

高妻の峰に向っている門澤の雪は何回の夏を消えずに残っているのだろう。いつまでたっても消えないだろうな。

文化十四年に本坊（勧修院）が高田の関山宿の者に入会を許した証文に「戸隠山裏山、高妻山裏裾、弥陀之大門ゟ西北」（高妻山は十三仏の内の阿弥陀であるから「弥陀之

大門」）とある。高妻山北側斜面を大門と呼び、そこにある沢。いかにも夏でも雪の残りそうな地形である。ただし、表題に「大門沢」といい、歌中に「門沢」というのは気に掛かるが、１の歌で「大沢通」と「沢通」が同じようであったように、「大」の字の有無は気にする必要はないのかもしれない。

9　　苔の實の味梅

白露を貫き留しさまなして●●●味有苔の實の玉

白露を貫いて留めたような形をして？？？の味がする苔の実の玉

●は汚損甚だしき文字。

「苔の実」は『裏山参詣案内記』に「丸粒にして玉緒なし青赤白(あおあじろ)の色合ありて味生梅(あじはひなまむめ)乃如し」とあるが、何を指すか不明。

越志百首では、

「幾千年かわらで生る苔の実の味にたぐへのなきぞたのしき」

幾千年かわらないで生きる苔の実の味になぞらえるものないのは愉快なことだ

10　　萬年草の栄枯

仙人は千年をふとも此草の生立枯るほどはしるまじ

仙人は千年を生きるというが、千年だから万年も生きるこの草が枯れるのは知らないであろう。

スギゴケのように乾燥していても水につければ戻り、人の生死を占うといわれていた。

『裏山参詣案内記』に「亦万年草と云ふあり四季共に青々として不長不屈(のひずかがまず)数年を歴(へ)てまた水に浸せば青し人の生死(いきしに)をためすに験兆(しるし)ありとな云ふ」とある。

『信濃奇勝録』には「山中になきの松万年くさというものありなぎの松五葉の逞松を云万年草(まんねんぐさ)杉苔のごとく(こかん)して枯乾に及ふといへとも水中にひたせバ生かへる高野山奥の院にも有よし」とある。

11　　劔の峯の眺望

富士浅間おきの小島のここちして浪のうねりぞ四方の山々

富士や浅間が沖の小島のように思われ、四方の山々は浪のうねりのようだ

「うねり」の「り」は、形は明瞭だが何の字か不明なるも文脈としては「り」。

劔が峯は、『善光寺道名所図会』及『戸隠山案内記』では高妻山と元の乙妻山（2297メートルのピーク）のことという。『奇窟怪岳』では高妻山と元の乙妻山の間という。『戸隠神社御境内並付近図』では乙妻山と高妻山の間を「劔ノ道」といっている。

高妻山と元の乙妻山を合わせて剱の峯であり、間の尾根が剱の峯であろう。

『裏山参詣案内記』に「この高妻乙妻の二峯は御裏山の最絶頂にして南に富士浅間を見ること波涛のごとく」とあり、この歌と同じ趣意である。

12　髭摺（ひげすり）の攀登（はんとう）

高妻の山の髭摺よつる身は手草にあゆむ思ひ也けり

高妻の山の髭摺といわれる箇所を登ろうとしてすがりつく身は、手を使って登る思いだ。

「髭摺（ひげすり）」は『戸隠神社御境内並付近図』に「ヒゲスリ」とあり、現在もそう呼ぶ。

「手草にあゆむ」は『裏山参詣案内記』に「その所乃絶壁数千丈にして谷底闇（くら）く巌上（いはのへ）はづかに馬乃背斗なる所手草（たくさ）を取りて歩み」とある「手草を取りて歩み」と同じ表現。手草は、歌ったり舞を舞ったりするときなどに、手に持つもので神楽の採り物としての笹などをいうことが多い。ここでは「笹を手でつかんで登る」ほどの意味。事実、髭摺（ひげすり）は急峻であり、『奇窟怪岳』には「例の如く足よりも手で登って、笹の枝を、木の根をつかみつかみ息も切々に登つて行く内に」とある。

13　嶺下の雷雨

鳴神は麓の空に轟きて千里にさわぐ夕立の雲

雷は麓の空に轟いて、千里にわたってざわめき渡る夕立の雲

鳴神は雷。どの嶺というより裏山の高い山一般であろう。

14　仲秋の峯の雪

秋はまだ仲空なりし木の間よりはや見えそむる高妻の雪

秋はまだ途中の空であるが、木の間からはもう見えはじめた高妻の雪よ

戸隠裏山は雪の消えるのが遅く、雪の来るのも早い。元禄時代は旧の六月十五日から七月二十日までの間だけ参詣が許されていた。

15　大富邊（おおとむべ）の雨宿り

行暮てたつきもしらぬ山人に雨宿めぐむ大富邊の神

行き暮れて、どうすればよいのかも分からない山人に、雨宿の場所を提供してくれる大富邊の神

「雨宿めぐむ」とあるが、ここにはかって小屋があって、『奇窟怪岳』によれば、明

治十五年、東京の守田宝丹氏が妻女と共に登山して難儀し、後人の為に三百余円を投じて木造小屋を建てたという。越志百首には「大富(おおとの)のすゝの篠屋の雨やどり」とある「すゞの篠屋」（篠葺きの小屋）にあたる。

神仏分離の時に裏山の十三佛を神に置き換えたことがある。『戸隠神社御境内並付近図』の大富祠がその一つで、歌の「大富邊の神」にあたる。この地図には、天照・伊弉諾・青橿・大富・活角・土根・豊雲・常立・葦牙比等の十四の祠がある（十三仏をあてれば十三なのだが、小池の所に十三仏ではないが弁財天の祠があり、これを加えている)。大富は下から五つ目で地蔵菩薩にあたり、現在は五地蔵山と山名になっている。

『裏山参詣案内記』には「五之祠(二座)天神第五(イツヨノ)代神　号大冨(オホドノ)社 / 大斗能地命 / 大斗乃弁命」と記し、この「大斗乃弁」が「大富邊」にあたる。

16　　風袋道の消熱

岩根木ね涼しき風も透出(すきいで)て暑をはらふ山凹(やまぼこ)の道

岩や木の間から涼しい風も通り出て、暑を払う山凹(やまぼこ)の道

『戸隠山案内記』に大胴（洞）沢に「風袋道」があるという。『裏山参詣案内記』にも「風袋と云ふ所あり両側山岡にして凹(なかくぼ)乃山脈乃岩根木根より冷風吹出て」とある。『戸隠　総合学術調査報告』には、水場から五分ほど上の登山路西側に「風穴」があるいう。

「消熱」は暑さをさますこと。

17　　不動の清水

ゆるがざるこの石清水なかりせばかわきに悩む人は傷まし

揺れ動かないこの石清水がなかったならば、渇きに悩む人はつらいことだ

『戸隠山案内記』に氷清水は大胴（洞）沢にあるという。『戸隠神社御境内並付近図』にも大胴（洞）沢に不動滝と並んで氷清水があり、この氷清水が不動の清水であろう。『戸隠　総合学術調査報告』だと不動瀧から 15 分ほど上に水場があるという。『奇窟怪岳』では一杯清水という。現在でも高妻登山最後の水場である。

18　　不動瀧の身滌(みそぎ)

さくなだり落る瀧つ瀬見るにだも身の穢をば忘れける哉

たぎり落ちる滝の急流を見るだけでも身の穢を忘れたことだった

『延喜式』の「六月晦大祓祝詞(みなづきつごもりのおおはらえののりと)」に「佐久那太理(さくなだり)に落ち多支都(たぎつ)」（たぎり落ち、さか

まき流れる）とある。不動滝は『戸隠神社御境内並付近図』にあり、『戸隠山案内記』では大胴（洞）沢の半腹より発すとある。

一不動への登りの大洞沢には 3 カ所のクサリ場がある。滑滝の長さ約 10m の真っ直ぐの登りのクサリ場、帯岩の約 12m ほどのトラバース（横断）のクサリ場、それからすぐ一段高めへの不動滝の登りのクサリ場。『戸隠　総合学術調査報告』231 頁だと、不動の岩帯の東が不動滝だという。

歌は「見るだけでも」とあるが、『長野県町村誌』には、不動滝は大胴沢の半腹より発して「裏山登山の人、身を澡潔する所なり」とある。「澡潔」は洗い清めることで、仏教的にいえば「垢離」、神道的にいえば「身滌」。

『信府統記』には不動滝が「本社ノ前ニアリ、参詣ノ輩爰(やからここ)ニテ垢離(こり)ス」とあるが、位置からみて別物であろう。

19　　岩帯の危嵯

山●●る千尋の岩のいは帯はふみ〆つつもわたる危さ

山？？る木？の岩の岩帯は、踏みしめながらも渡る危なさであることよ

●は汚損して読めず。

岩帯は『戸隠神社御境内並付近図』では、不動滝、氷清水の上にある。『裏山参詣案内記』には「裏山の登り口に岩帯と云ふ所あり岸壁滑かにして足踏甚(いと)危ふし心すべし一名懺悔岩とも云へり修験道の者此所ニ而六根清浄の懺法を修る所なれば左も云へり」とある。現在、不動滝の下に、横にトラパースするクサリ場があり、「帯岩」という。『戸隠　総合学術調査報告』ではまだ「不動の岩帯」といっているが、近年は帯岩と呼ぶ。『奇窟怪岳』には「不動の一枚岩」とある。

越志百首には、

「巌壁の苔滑(ぬめら)に心せよ足踏ごとの甚(いと)も危し」

巌壁の苔が滑らかだから注意しなさい。足を踏むごとにたいそう危い。

20　　参拝人の口號(こうごう)

壁だにもこたへぬ道の淋しさにおもはずさけぶ友呼の声

壁さえも答えてくれない道の淋しさに、思わず叫ぶ友を呼ぶ声

字形としては「壁ほにも」よ読めるが意味不明ゆえ「壁だにも」とした。

21　　大澤の臼取男

岩根木ねふみさくみつつ道よりも大き臼木を背負ふ山人

岩や木の根を踏み分けながら道よりも大きな臼にする木を背負う山人

祈年祭の祝詞に「磐根木根履(ふ)み佐久弥(さくみ)て」とある。「大沢」は牧場の東側に大沢地籍があるがこれか。越志百首に「奥山の臼の大木を年毎に手安くとりて出す賤の男」からすると、道は街道ではなく、山から里への道であろう。

22　　二夜泊りのわさび取

渓(たに)深み二夜どまりのわさびとりたつき少き處をぞしる

谷が深いので二晩泊まりのワサビ取りになる。生計の糧の少い様子が知られる。

大洞沢に野生のワサビがある。大洞沢は奥山ではないので「二夜泊り」は、行程の長さではなく、同じ場所で時間を掛けてのわさび取りであろう。

23　　表山の遙拝所

信(まこと)から身の危さも忘れはて高根を巡る人は勇まし

信心の清らかさから、身の危険も忘れて、高い峰を巡る人は勇ましい

「信」を「まこと」よ読み、「信心の清らかさ」と解してみた。

越志百首の「天照す日の大神を日の出に真向に拝む事の尊さ」からすると、安置した神仏を遙拝するのではなく、高所から太陽を拝む所か。遙拝所として今も伝わる場所はない。

24　　眼鏡岩

信濃路をたゞ一目にと見はるかす山邊にかかる眼鏡岩哉

信濃路をたゞ一目に見ようと見渡す、山辺にかかる眼鏡岩だ

『戸隠神社御境内並付近図』に、高妻と乙妻の下の方に「眼ガネ岩」あり、その辺りに目立つ岩がある。その岩が信濃路を見渡している眼鏡のようだ、と解する。

25　　冠岩

天か下に其名も高く位して冠岩をつくる●か

天下に其名も高くあって冠岩をつくる？か

「つくる●か」の「●」は汚損で読めず。

越志百首に「天の戸と共に落居し冠岩」とある。岩戸開きの伝承に冠はないが、後世、神の姿は冠を頂いて描かれるので、似た岩を戸と共に落ちた冠になぞらえたと思われるか。信濃毎日新聞明治 30 年 9 月 15 日から始まる九回連載「戸隠壮遊記」（花月曲崖（飯島保作））に「九頭龍峯を下り、更に戸隠峯に登る。両峯の間、一脈の渓水流る、此処を袖繋ぎと云ふ、左方の渓間に冠岩を見る」とある。具体的には

特定しがたいが、地元で奥社参道途中に法燈国師母公祈願観音堂址への道があるが、そのかなり先に目立つ岩があり、あるいはそれを指すか、という者もあり、「戸隠壮遊記」に記されるように九頭龍山と戸隠山の間の尾根上から見えることが確認できれば有力候補である。

越志百首では、

「天の戸と共に落居し冠岩皇命（いわすめらみこと）の業にもある哉」

天の岩戸とともに落ちてきてある冠岩は、神がそのようにしたのだなあ

「皇命」の読みは『万葉集』に「中皇命（なかつすめらみこと）があるので天皇を意味する「すめらみこと」でいいだろうが、意味が不明。神としておく。

26　蟻のと渡り

蟻の徒も手を引渡る山の背をためらひたどる身こそ寒けれ

蟻たちも手を引いて渡る山の背を、ためらいながらたどる人間の身こそ寒けがする

「寒けれ」の「れ」は一部汚損なるも推測。

現在は「蟻の戸」「蟻の渡」「蟻の塔」などといわれる。いづれにせよ歌の「蟻の徒」は掛詞で、這って渡る人の姿を蟻たちにたとえている。極めて狭く渡るに危険な戸隠山の尾根の一部。

27　千丈の瀧

聳え立千丈の巌を引裂て落る瀧つに震ふ山彦

聳え立つ千丈の巌を引き裂いて落る瀧川の音に震える山

「引裂て」の「裂」は汚損されているが文脈から「裂」であろう。

千丈の瀧は『長野県町村誌』に、「高さ四十二丈余、幅一丈余、裏山中央の渓澗（門構えの内は日ではなく月）より発し村の子の方裏山の南面に落つ。（略）流末西南に赴き表濁リ川に入る。」とある。『戸隠神社御境内並付近図』の高妻山山腹に画かれている。現在も五地蔵山から見て高妻山の西の山腹にそれらしき滑滝があり、水の少ない夏場

28　かへらずの渕

禍（まが）つひの人を贄（にえ）すや□□てかへらずの渕と聞もいまはし

八十禍津日神（やそまがつひのかみ）が人を生け贄にするのか、帰らずの渕と聞くのも忌まわしい

「贄すや□□て」の「□□」が未読。

かへらずの渕がどこを指すか不明。越志百首「よせかへりゆらるゝ川のさゞれ石岩ほとなりてかへらずヶ淵」からすれば、川の淵である。

八十禍津日神は、黄泉から帰ったイザナギが禊を行ったときに生まれた邪悪・禍害を司る神。

越志百首では、

「よせかへりゆらるゝ川のさゞれ石岩ほとなりてかへらずヶ淵」

寄せ帰り、揺れる川のさゞれ石が大きな岩となるほどの時間が経っても死んだ者は帰ってこない「帰らずヶ淵」

29　奥嶽のわばの音

おそろしや降積雪の高ねよりはり裂落るいかづちの音

恐ろしいなあ、降り積る雪が高嶺から張り裂けて落ちる雷のような音

「はり裂落る」の「裂」は汚損されているも文脈から「裂」であろう。

「わば」は表層雪崩で、東北地方でも「わば」という。奥嶽は本社裏の嶽をいうか。ここからの雪崩で本社はたびたび潰れていて、現在はコンクリート造りになっている。

30　寒林の木花（きばな）

吹荒（すさ）ぶ嵐につれて村雨の木末に結ぶみよしのの花

吹き荒れる嵐につれて村雨の降りかかる木末に出来る吉野の桜のような氷の花

「吹荒ぶ」の「荒」に草冠がないが文脈から「荒」であろう。

木花は霧滴が樹の枝などについて氷結したもので、現在も奥社やスキー場で見られる。

31　絶壁の風の音

三軍に謀りし人の簫（しょう）の音か岩間にひゞく風の音なハ

三軍の参謀であった人の簫の音であろうか。実際は岩間にひゞく風の音である

部分が汚損しているが文脈から「音」と推測。

「ハ」は意味不明で「り」とありたいところ。「三軍に謀りし人」は不明。

越志百首は、

「足引の深山の奥の谷の戸にたへず吹なり間々の谷風」

深山の奥の谷の入り口に絶えず吹くことだ、崖の谷風は。

「間々」は「崖」と解する。

32　　遠望の富士

雪に冴え雲井遙に見えけるは富士の高根の甲斐も有けり

雪に冴え、雲の向こう遙に見えるのは、富士の頂が高いからで、そこには甲斐の国もある。

「11　劔の峯の眺望」と同じような情景。

33　　百間長屋の挟渡り

神ならで誰か棲み得む岩殿に渡り橋有人のかよひ路

神ではなくて誰が住むことが出来ようか。岩の御殿に渡り橋がある。人の通う道だ。

三十三窟の一つである現在の百間長屋には橋もないし架けるような場所もないが、百間長屋と西窟の間は沢があり、いまと異なる昔の登山道では、そこに橋があったことは考えられる。百間長屋そのものに橋があったのではなく、百間長屋の先の所に橋があったことになる。「挟渡り」という言葉はないが、狭く通るに難しいことを思わせる。神は住むことが出来るが、人間はこの橋を通うことになる。百間長屋は行者修行の地であるが、「神ならで」と神社にふさわしくしている。

34　　西窟の三尺坊

岩室に三年籠りて秋葉山峰の通ひ路開きつる君

岩室に三年の間籠って、ここ戸隠山から秋葉山までの飛行する峰の通い路を開いた君よ

西窟は三つの窟からなるが、その中の窟に、学問行者、役の行者、秋葉三尺坊の石仏がある。三尺坊はここで修行をし、地上三尺を飛行する術を身につけたといわれ、後に遠州の秋葉山で火防の秋葉信仰を開いたともいう。現在、宝光社鳥居脇にある岸本家（元教釈院）が秋葉三尺坊大権現本宮である。

橘鎮兄「科野佐々礼石」に「秋葉三尺坊は教釈院の住僧（秋葉堂は奥院の山に有化して教釈院に住し後中院の庭上大杉にのほり宙を飛行して遠州に帰る）」とある。これに照らせば、峯々の上を飛行して遠州の秋葉山に赴いたことになる。

35　　三十三窟の奇勝

三十餘り三つの岩屋に仙人のくしびの跡を留るみほ倉

三十三の岩屋に仙人の霊妙不思議の跡を留（と）どめる祠があることよ

「みほ倉」は宝倉（ほくら）（祠）に美称の「み」を付したか。

歴史的には三十三窟で修行したのは行者だが、神道の立場から仙人としている。
越志百首では「自然湧出の神々の御在所（ございしょ）」という。湧出は仏にあてるのが常で、神が湧出するというのは聞かないが、『顕光寺流記並序』ある聖観音・千手観音・釈迦・地蔵の湧出を転用している。なお、明治以後一時期三十三窟に神々をあてたことがある。

36　奥社の秋の月

岩間より清（さや）けく見ゆる月影に神も昔を忍びますらん

岩間から清く見える月影に、神も昔を忍んでいらっしゃるだろう

37　前原の幽魂祭

幽（かく）り世にまとへる人ぞ多からじなき魂祭る原の根□

薄

あの世に迷っている人は多くはない。死後の魂を祭る原の根？

「まとへる」の「る」は一部汚損なるも推測。

歌の末尾に汚れによる乱れがあって読めない。

幽魂祭という語は一般にないが、「なき魂祭る」とあるから「魂祭り・霊祭り」のことで、宝光社前原に雪舟事件の犠牲者を祀った幽魂碑があり、地蔵盆に合わせて祭が行われている。

越志百首では、

「誰もみな灯火かゝげ花手向（たむけ）□とともに参る事哉」

儀

38　自然石の地蔵尊

心なき岩ほもおのづ形あれば奇しき御魂は寄るとこそしれ

心ない岩であっても、自然と形があるので、霊妙な御魂は寄りつくのだと分かる

「しれ」の「れ」は一部汚損なるも推測。

越志百首「名にしあふ前原堂の地蔵尊自然伝わる佐の御仏」とあるので、「自然石の地蔵尊」は現在の地蔵堂の内の埋まった石の地蔵。

弘法大師が地中から湧き出た石に彫ったという伝承がある。

前原は神社の外であるので、神仏分離の時にも地蔵は神に見立てられることなく地蔵のままとなっている。

39　　火の御子社の梟鳥

火のみ子のあかき森にもふくろふの鳥鳴く夜は□●くそ□□ける

火の御子の名前のように明るい森にもフクロウ鳥が鳴く夜は？？？？？？

「火の御子の名前のように明るい森」としておいたが、「あかき森」に」別の意味があるかもしれない。

越志百首では、

「火の御子の杜の古枕に夜るは来て暁かけて福郎の鳴」

火の御子社の森の古杉に夜は来て暁にかけて梟が鳴く

歌題の表記もは「火の御子社の杜の福郎鳥」で、久山百首と少々異なる。

40　　西行桜の縁結び

さる児と歌よみかけし桜木にさらぬ縁にしの花を●●

猿児と西行が歌を詠みかけた桜の木に、なんでもない縁の花を？？

「●」は汚損で読めない。木に登っている子を「猿のようだ」と西行が歌いかけたところ、子が「犬のようなお坊さんがきたから逃げたのだ」と歌で答えたという『善光寺路名所図会』にある火の御子社の西行桜の故事をふまえている。

しかし、桜に関して縁結びの伝承もあったと思われるが不明。火の御子社に現在夫婦杉はある。

越志百首は、

「千代かけてむすぶ契りは児桜木々の岩根のくちはつるまで」

何時までもと結ぶ契りは、児桜の木々の所にある大きな岩が朽ち果てるまで続く

41　　雪消の草花

雪の下に永く春日を待なれはきゆるをまたで咲ける草花

雪の下で長い間春の日を待つので、雪の消えるのをまたないで咲いた草花

「草花」の「花」は一部汚損なるも推測。「咲」も汚損されているが、文脈で「咲ける」とした。

42　　種池の雨乞

種池と名に負ふからに世の人の田畑を頼む雨乞の水

種池という名があるからこそ、世の中の人が水を恵んでくれるように田畑を頼む雨乞の水

「雨乞の水」の「水」は一部汚損なるも推測。

かって飯縄山登山道沿いの種池の水をもらって農家が雨乞いに用いた。現在も六月中の巳の日に種池祭がある。

43　種池の蓴菜（じゅんさい）

千年（ちとせ）ふる澤に生ては種池の古きためし●●□ぬ縄

千年を経た澤に生えていて、種池が古いことの例として？？？ぬ縄

「古きためし」の「し」は一部汚損なるも推測。

今の種池にもジュンサイはある。

越志百首では、

「名にしあふ我種池のぬなわ草ねざしぞ深き生ひ茂る哉」

有名な我が種池のぬなわ草の根は深く生い茂っていることだ

「ななわ」は蓴菜の古名、「ねざし」は根のこと。

44　涌池の念仏

あみた仏（ぶ）の声に湧きたつ池水は底根□響□てなるらむ

南無阿弥陀仏の声に応じて湧き上がる池の水は底？？？て、そうなるのだろう

「なるらむ」の「む」の箇所はかなり汚損されているが「む」と推測。

融通念仏の詠唱には「南無阿弥陀ァン仏（ぶ）」といったものがあると五来重「日本人の仏教」にある。実際にそのように唱える習慣もある。

涌池はいまの念仏池。池の周りの土を踏むと池に泡が立つ。親鸞の念仏に合わせて池の水が涌きあがったという伝承がある。

越志百首に、

「御ほわりの唱ひ込にし念仏の池の底より涌出るなり」

御上人が池に向かって唱えられた念仏が、池の底から涌き出たことだ

「御ほわり」は「御祝（はふり）」で、神道系の呼び方だが、親鸞を指すと思われる。

45　大端の炭焼

大端に立つる煙の炭釜はこの山人のかて炊（かしぐ）くなり

大端に立っている煙の炭釜は、この山人の生活の糧を稼ぐものである

本文「大端」の「大」、及び「炊くなり」の「り」は一部汚損なるも推測。

大端とは大橋（大橋は信濃町と長野市(旧戸隠村)の境で小さな橋と取水水門がある辺り）かとも思われるが、戸隠には「おおはし」と呼ぶ箇所がいくつかあり、いずれも地域の端に位置するので、地名ではなく、「ずっと向こうの端の方」かもしれない。

46　　薪木の橇引（そりひき）

かちならば万度背負はん山薪（やまき）を一手におろす●●●●●●●

歩いて運ならば何回も何回も背負うであろう山薪を、まとめて下ろす？？？

越志百首に、

「わけて又真柴（ましば）こる男の手なれわざ橇もて運ぶ谷の細道」

ことさらに柴を刈る男の慣れた業であることよ、橇でもって運ぶ谷の細い道よ

「真柴」は柴の美称。「こる」は刈る。

47　　山谷（さんこく）の斧音（おのおと）

物すごく時も寒けし谷隅の木魂（こだま）●る杣（そま）の斧をと

たいそう寂しく寒々している谷の隅の木魂？？木樵の斧の音

●は汚損字。「杣の」の「の」は一部汚損なるも推測。

越志百首に、

「杣木（そまき）取引手あまたの斧の音ひゞきわたりし谷の下風」

山の木の刈だしである。多くの人の斧の音が響き渡る谷の下の方を吹く風よ

「引手あまた」はたんに多くの人とした。

48　　木やりの音頭

宮木引杣（みやきひくそま）の頭（かしら）の言挙（ことあげ）にやり声あわす賤（しず）の山人（やまびと）

お宮用の木を引く木樵の頭の音頭に高い声で合わせる素朴な山人（やまびと）

中社を建てた時の宮木引きがこうであったという。一般的な歌か独特かは分からない。

49　　蔥蓮竹節（そうれんちくせつ）の奇効

里人の病をからす薬●原山●て●にそ●れる

里人の病気をなおす薬？原山？？？？

歌題は越志百首より補う。歌も汚損多し。

「病気を治す」ことを「病気をからす」というか心許ない。

「蔥蓮竹節」は不明。なお蔥はネギ。蓮はハス。竹節人参は鎮咳剤、痰薬に用いるので、「蔥」「蓮」「竹節」、あるいは「蔥蓮」「竹節」かもしれない。

「科野佐々礼石」に「胡黄蓮（薬種効能有）」と薬の紹介がある。今井家、横倉家が薬を扱っていたという。

越志百首に、

「嶺高根(みねたかね)越て掘出す蒸蓮に蒸蓮竹節の奇効うるわし」

高い山の頂を越えて、掘り出してくる蒸蓮だけに、蒸蓮竹節のすぐれた効果は素晴らしいものだ

50　中社の三本枕

神さびて古●●居そしられける●（以下不明）

神々しい古？？居が知られた？？？？

汚損甚だし。歌題は越志百首より補う。

越志百首には、

「我山に神さびたてる三本枕みどりの色は千代もかわらじ」

我が山に神々しくも立っている三本杉のみどりの色はいつまでも変わらない

51　中社のささ れ瀧

山高●（以下不明）

山高？？？？

汚損甚だし。

越志百首には、

「水無月のあつき盛も袖ひぢてむすべば涼しさゞれ瀧水」

水無月（陰暦六月）の暑い盛りにも袖をぬらして手ですくえば涼しいことだ、さゞれ瀧の水は

52　水盤の吹出し水

●●●の●（以下不明）

？？？の●？？？？

汚損甚だし。

歌題は越志百首より補う。

「水盤の吹出し水」は不明。

越志百首に、

「呑人の心きよさもしられけり吹出したる水盤の水」

呑む人の心の清らかさも知られるものだなあ、吹き出している水盤の水に

53　宣澄社の盆踊

此神の御幸らそ世●●●なれ躍り手祈る□の●●帛

この神の御幸？そ世？？？？躍って祈る？の？？帛

汚損甚だし。

越志百首に、

「年毎におこり煩ふ人あれば祈る験(しるし)の炳焉(へいえん)哉」

年毎に瘧を煩う人があれば祈るのだが、その効果の著しいことだなあ

宣澄踊りのことだが、その歌詞に「満体の神の功徳があるからよ」とある。

54　朝晩の宮太鼓

明暮に神に仕ふる宮守の上下に響くはつゞみ也けり

出てなん

明けても暮ても神に仕える神官の上下に響くのは鼓であることよ

歌題は越志百首より補う。末尾左に「出てなん」の字があるが、汚損を表装するときの乱れと思われる。

『戸隠山案内記』によれば、手力雄神と九頭竜社への献供の合図に「太鼓」「鼓」を用いている。（太鼓と鼓を同じ意味に『戸隠山案内記』は記している）。

55　釜戸の井水

名にしあ●●●雲ふく●水●（冬）も湯気たち●出にけ（り）

名に？？？雲吹く？水？冬でも湯気が立ち？出ることだ

歌題は越志百首より補う。歌の汚損甚だしい。

極意家のカマド池のことであろう。皿貸し姫の伝説がある。

越志百首に、

「名にしおふ釜戸の淵に涌泉手もふれがたき水の色哉」

その名のとおりの釜戸池の淵に湧き出る泉は、手も触れがたい水の色だなあ

久山百首と合わせて考えるに、冬も暖かな湧水で湯気が立っていて、それを釜の「名にしおふ」といったか。

56　伏拝(ふしおがみ)の神寄枕(よりすぎ)

其の昔玉の光りにひれ伏ておろがみ祀る神かゝりすぎ

その昔玉の光りにひれ伏して拝んで祭る神が寄りついた杉

汚損でまったく読めない字がいくつかある。「がみ祀」「すぎ」は推測である。

伏拝は神道にある。奥院から地蔵の御正体（みしょうだい）が飛んできて杉の木にと

りついたという。女人禁制で奥院に参詣できない女性のためにここから奥院を拝むように人々に告げたといわれる。

この杉を「神寄杁（よりすぎ）」という呼んでいたのであろう。

57　宝光社石階（せっかい）

岩坂を百八拾段に願充●●（以下不明）

岩坂を百八拾段に願充？？？？？

汚損甚だし。

越志百首に、

「数百段の石階をだに安しと登り尽して祈る願事」

数百段の石階でさえ、これくらいのことはと登りとおして祈る願事

戸隠神社で最も長い階段で、鳥居から上で 193 段ある。

58　烏帽子形の雉の声

（烏帽）●春さりくれば鳴き〻す我●●●●●そひ●

烏帽子？春になれば鳴き？？我？？？？？？？

汚損甚だし。

越志百首に、

「烏帽子形杜の木蔭にき〻す鳴声斗こそ春は来けり」

烏帽子形の杜の木蔭に雉子の鳴く声だけがするが春は来たのだ

「烏帽子形」は地名と思われるが不明。

59　九頭龍大神日の御供（ごく）

現身の神の御座（みま）しそ尊とかる日に聞食御贄（きこしめすみけ）のかむらひ

現身の神のいらしゃることこそ尊いものだ。日ごとにお食べになる御供のかむらひ

「かむらひ」は意味未読。

九頭竜大神は生きが神さまで、毎日寅の上刻に焚いた米一升をお供えし、そのまゝ後を振り返ることなく戻ってくる。翌日にはお供え物は一つも残らず無くなっているとのこと。またその食べっぷりで占う。

越志百首に

「日の御供に残受の験数多（しるしあまた）あり祈乞（こいのむ）人の事の御さとし」

毎日の御供に叶う叶わぬの験が多くある。願う人への願い事のお告げだ

「祈乞（こいのむ）」は「乞祈（こいのむ）」が逆になったもの

60　歳末の宮籠

古年にふり積雪を踏分けて宮籠なす庭のかゝり火

去年降り積った雪を踏み分けて宮籠りをする庭のかゞり火

ここでの宮籠りは越年神事のこと。次の歌の「年越えの無言行」と同じ。いまでもかゞり火を焚く？

61　年越えの無言行

常闇と暮行時を思へ人いかにせん便(たより)言ふすへのなき

常闇となって暮れて行く時を思って下さい、あなた。どうしようか、言いたいことを言う手段がない

十二月三十一日（大晦日）の年越の祭から一月一日の岩戸開き神事。午後一一時、晩餐を終えた神職一同は社殿に入り、以後無言で過ごす。元日の朝、祭祀を終え朝日を待ってはじめて「あけましておめでとう」と唱える。

62　岩戸開の神

岩戸あけし昔もかくや朝くらの声に明ゆくしのゝめの空

岩戸を開けた昔もこうだったのだろうか、朝、すがすがしく見える神霊の座の、「あけましておめでとう」の声に応じて明けていく明け方の空

「岩戸開の神」は本社祭神の手力雄命。「朝くら」は、朝、すがすがしく見える神霊の座。新年の朝であろう。前の歌参照。

63　一月七日鎮火の注連縄(しめなわ)

日は七日誓約(うけい)の数に〆(しめ)結ひて火鎮祭(ひしずめまつ)る火はしらのみ子

日は一月の七日、誓約の数だけ〆を結んで火を鎮めるために祭る火柱の御子よ

火鎮祭は、伊邪那美が産んだ火結神を鎮める祭。越志百首に「山本の苔むす枕に七五三(しめ)ひきて居ますが如き神さびにけり」とあるから杉に注連縄を結ぶのだが、現在は取り立ててそのような行事はないという。詳細不明。

64　花鎮(はなしづめ)の神事

花は根にかへれと神のみ霊をば本つ宮居に鎮め奉りき

花は根に帰れと神の御霊を本の鎮座の場に鎮め奉ったよ

花鎮（はなしづめ）の神事は落花の頃、各地の神社で疫病除けのために行われる。明治二年の神祇官届に四月十五日の花之會神事があるが、これかも知れない。現在は行われていない。

「花は根に帰れ」と「み霊を鎮める」とには通ずるものがある。花は疫病の原因で、これには根に還って鎮まってもらわなければならない。神もまた疫病をもたらすと考えられていたので鎮まってもらわなければならない。

65　祈年祭（きねんさい）の種蒔

きさらぎに御年を祈る神祭は瑞穂（みずほ）の秋の種を蒔なり

二月に収穫を祈る神祭は瑞穂（みずほ）の秋の種を蒔くのである

祈年祭は「としごいのまつり」とも。

明治二年の神祇官御届によれば大祈祭が新暦五月同従十二日至十八日となっている。この大祈祭が祈年祭のことなら現在の五月十四日と同じ時期である（他社では通例は二月であるが、戸隠は寒冷のため現在は五月。この二月のものを五月に行うことについては政府に当時許可を求めているという（越志）。百首が詠まれた時は五月になっていたはずだが、この歌で「二月」というのは現在の他社と同じ時期だが、一般の時期を念頭に二月としたのかもしれない。

祈年祭は五穀豊穣を祈る大事な祭事。

66　御門祭（みかどまつり）の御幣焼（おんべやき）

内とのを言排（いひそけ）まして皇（すめろき）ろきの御門を守る神の御幣（みてぐら）

内と外から入る悪いものを言い退けて、天皇の御門を守る神の御幣（みてぐら）

延喜式祝詞「御門祭」に「内外」がある。通常「内外」を「うちと」と訓んでいるが、「類聚名義抄」の観智院本には「内外」で「うちとの」と訓んでいる。

「戸隠神社年中行事略科」（明治廾三年国弊小社昇格に合わせて調えた祭式、『戸隠総合学術調査報告』91 頁）に、秋季例祭に奥社の八月十五日「当祭典には御幣焼きの行事がある。」とあり、十四日が中社、十六日が宝光社となっているが、この歌の御門の御幣焼は、「信府統記」にある奥院の「二王門是ヨリ坂ヲ上ル、二王門前ノ左右ノ木ニ綱ヲ引、正月八日惣山ノ衆徒読経、火フセノ祭アリトナリ、」に関係があると思われる。この正月八日の火フセノ祭は七日の鎮火祭を受けて翌日に行われたのかも知れない。

宮中での御門祭は六月と十二月に櫛石窓神・豊石窓神を祭るのであって、この二神は現在の戸隠神社でいえば、元仁王門である随神門の神である。つまり、仁王門での火フセノ祭が、神社になってから御門祭となったかもしれないが、現在はそのよ

うな祭は行われていない。

67　大門雰の夕晴

逆さ川渡せる雰の一筋に靡けは晴る夕くれの空

逆さ川に渡る霧が一筋に靡けば、明日は晴れる夕暮れの空

「奥社の方から霧が出て長い帯を引くと、ダイモンギリといって、好天が続く」という戸隠村のいいならわしがある（『戸隠　総合学術調査報告』の宮田登「戸隠信仰と巳待ち」）。

68　休屋の眺望雰の海

飯縄山高ねはかりは浮出てふもとは深き雰の海原

飯縄山の頂だけは浮き出て、ふもとは深い霧の海原だ

いまの社務所あたりが休屋で、神社関係者がくつろぐ（一杯やったり）ところ。中社、宝光社にもあった。『戸隠山往来』に「休屋にて一服致し、不二、浅間を遙望し」とある。

69　神使（しんし）の双鳥（ふたがらす）

しのゝめを告る鳥の鳴声に昔を忍ふ神の御威力（ごいりょく）

夜明けを告げる鳥の鳴声に昔を偲ぶ神の御威力（ごいりょく）

「双鳥」は「ふたがらす」と訓でおく。「御威力」をミイツとも読みたいが字数があわないので「ごいりょく」。

『戸隠山往来』では、二羽の鳥が日々、薪を啄み来て神供の料に備え、御供の残飯を食べたとある。「科野佐々礼石」（1860 年）には「白き鳥薪を集」とある。

『戸隠山案内記』には、一升飯を御敷膳に九つに盛り、残り鍋付きを二握として「神使二羽の鳥に給与す」とある。

70　暁の三光鳥

月星の影まはらなる暁に日を呼ぶ鳥の声の清けさ

月星の影まばらな暁に日を呼ぶ鳥の声の清らかさよ

三光鳥はヒタキ科の鳥。鳴き声が「つきひほし（月日星）」と聞こえることからの名。「つきひほし　ほいほいほい」と鳴く。

ただし、戸隠ではオキボコというイカルも「つきひほし」と鳴くので、どちらかは

不明。

71　夕陽の慈悲心鳥

いつくしきけふも暮ぬと世の人の影を悲しむ鳥の鳴声

おごそかな今日も暮れたと、世間の人々を愛(いと)おしむ鳥の鳴声

慈悲心鳥は「じゅういち(十一)」の異名。鳴き声を「ジヒシン」と聞きなす。

「慈悲心」とあるので、「悲しむ」を「かなしくおもう」よりも「いとおしむ」と解する。

『戸隠山往来』に「慈悲心鳥の声に御山の深奥なるを感じ」とある。

72　閑眠の三宝鳥

物うさに眠りなせそと世の中の人の夢驚かす三宝の鳥

物うさに眠ってはいけないと、世の中のまどろむ人の夢を覚ます三宝の鳥

三宝鳥は「ぶっぽうそう(仏法僧)」の異名で、夜に鳴く。

73　午睡(ごすい)の郭公(ほととぎす)

夜は更に昼寝にたにも声立て眠を覚す山郭公(やまほととぎす)

夜は勿論、昼寝の時さえも声を立てわれわれの眠を覚す山郭公

74　春より秋に至る鶯

鶯も暑さをしらぬ山なれば常世の春と謡(うた)ひ鳴らん

暑さをしらない山だから、夏が来たとも思わずに、常世の春と鶯も歌い鳴くのであろう

75　断腸(だんちょう)の裘哀鳥

夜をこめて鳴なる音の哀さに身の成行を思ふ悲しさ

夜どおし鳴くという音の哀さに身の成り行を思う悲しさ

「断腸」は、腸がちぎれるほど、悲しくつらいこと。裘哀鳥は不明。

76　閑林の呼子鳥

人もな●□奥に誰をとて己れ音に立呼子鳥かな

人もな？？奥に誰ですかといって自分の音に答えて立ちあがる呼子鳥だなあ

汚損あり。

呼子鳥は古今伝授であるから不明というしかない。カッコウ、ウグイス、ホトトギスなど諸説あり。

越志百首に、

「やゝ寒きまだ花咲ぬ奥山になにを見よとや友呼子鳥」

やや寒く、まだ花の咲かない奥山に何を見ろといって鳴くのだ、友を呼ぶ呼子鳥よ

77　奥社の渡り猿

いつれよりいつれへ行か果をまきて八十(やそ)友かきを呼渡りさる

どこから何処へ行くのか？？？？？？？？多くの友を呼ぶ渡り猿

「果をまきて」が不明。「渡り猿」は定住しない猿か。

歌題は越志百首では「奥社渡り猿」

越志百首に、

「谷深き山又山を住家にて夜る昼となく渡るましら男(お)」

谷の深い山また山を住み家にして、夜も昼も移動する猿よ

「ましら」は猿。

78　倉獅子の岩籠

そぎ立る岩屋を己か伏戸にて猟夫(さつお)のかるゝ獅子のかしらを

遠く離れて壁のように立っている岩屋を自分の寝床として猟師が借りる獅子の頭を

倉獅子も何処の岩屋かも不明。「借りる」にしておいたが「かるゝ」も文意不明。

越志百首に、

「倉獅子の岩籠して朝な夕な友呼声のあはれなりけり」

倉獅子が岩籠をして朝晩に友を呼ぶ声は哀れなことだなあ

79　鳥居川の身滌

神拝む人のこゝろは淳直(すなお)なり鳥居の川に身滌(みすぐ)もろ人

神を拝む人の心は淳直(すなお)である。鳥居の前の川で禊ぎをする人々の心は

「鳥居川」はさかさ川。奥社鳥居の前にある。

80　岩魚の瀧登り

山川にすみ馴つゝも瀧登る岩魚の□み見□はうるけ人

山川に住み馴れているが、瀧を登る岩魚の？？？？？

「□み見□はうるけ人」は未読。

越志百首に、

「底深き清き流れの瀧つ瀬をみなれみなれて登る岩魚」

底が深く清い流れの激流を何度も見慣れて登る岩魚

81　牛玉の峰のねちり岩

禍物(まがもの)をねちり伏せたる御威力(ごいりょく)を石にとゞむる塞(さい)の神□

禍の霊を捻り伏せた御威力を石に止める塞の神？

「石にとゞむる」の「に」と「ゞ」は汚損部分の推測。

「□み見□はうるけ人」は未解。

越志百首に、

「その昔田村大将の退治せし悪魑魅(あくもうりょう)のなせしねぢ岩」

その昔、田村大将が退治した悪魑魅が為したねぢ岩

牛玉の峰のねぢり岩は、牛玉の峰にあったのであろうが今は所在不明。

82　児(ちご)の塔の懐旧

□と思●●を□こめし児の名の昔くわしく残る戸隠

？と思？？を？籠めた児の名の昔のことが詳しく残る戸隠

「□と思●●を□」は汚損多し。

越志百首に、

「児の塔純孝孝子の芳情を思ひまわせば頼母しきかな」

児の塔は、純な孝心をもった孝子の思いやり敬う心を思い巡らせると心強いことだなあ

妻にきた都の昔の男からの手紙を、字の読めない夫に代わって読んだ子どもが、夫婦仲が壊れることを心配して、ただの手紙のように読んだ、という伝承に基づいている。種本は「沙石集」の一本。

83　長明の火定塔

空蝉(うつせみ)の此むくろをは焼捨て常世朽(とこよくち)せぬ身とや成(な)りけん

現世でのこの身体を焼き捨てて永遠に朽ない身となったのだろう

平安時代の永保年中、戸隠山の住僧で法華経信者の長明が、無言のまま横にもならずに行を続け、最後は生きながらに身を焼き、兜率天へ昇る火定を行ったという「拾遺

往生伝」に基づく。

84　巴岩の矢ちり跡

勇ましき巴の前の矢のね岩われてうせても跡は残れり

勇ましい巴御前が、矢先で仏号を彫ったという岩が割れてなくなっても跡は残っている

『戸隠山往来』に「護法の峯、比丘尼石、巴岩等」とある。『戸隠山案内記』には、字蕪尾にあり、巴が女人結界のために奥社に詣でることが出来ず、望みを失って遙拝、側らの石に矢の根をもって仏号を彫ったという。道路修繕のため欠損したが残石があるともいう。字蕪尾は越水を含むかなり広い地籍であるが、女人結界と関わるならば比丘尼石と同様の遺跡であり、その近くと思われる。

85　木曽殿の古城跡

城の跡といふはよしなし落人(おちうど)のかくれ棲(すみ)にしうろにや有けむ

城の跡だといっても他愛のない。落人の隠れ住んだうろであろう

越志百首に「久寿(きゅうじゅ)二年木曾義仲は此山に遁(のが)れ籠りしあぶきなるよし」とあるので古城跡は木曽殿あぶきのこと。「うろ」は洞穴。

86　獅子岩の吼声

此岩の吼●る一声残し人聞かは実に現身(うつしみ)の獅子と●□

この岩の吼える一声を残し、人が聞いたならば実際に現身(うつしみ)の獅子と？？

歌題は越志百首より補う。●汚損字。

越志百首に、

「獅子岩のさけぶ声とも思ふ哉越水原(こしみずはら)の風の間ふく」

獅子岩のさけぶ声とも思われることよ。越水原の風の間ふく

獅子岩は越水にあったと思われるが今は不明。

87　硯石の溜り水

いつ来ても硯の水の溜れるは岩のみさをゝ書とめよとや

いつ来ても硯石の水の溜っているのは岩の節操を書とめろというのだろうか

「いつ来ても」の「つ」は汚損なるも推測。

硯石は中社から小鳥が池を経て鏡池に行く途中にある。近年、鬼女紅葉の手下である「おまん」と結びつけられている。

88　　硯石の眺望

誰か筆を染しなるらん硯石空に画(え)がける景色なりけり

誰が筆をとってすみを含ませたのだろう、硯石の水で。その筆で空に画(えが)いたような景色だ。

硯石は窪みがあって水が溜まる。ここから見る荒倉山はなかなかのものである。

89　　桜花の別品

かくまでに世に類(たぐい)なき色香にていかて深山にかくれ咲らむ

これほどまでに世に類ない色香をしていて、どうして深い山に隠れて咲くのだろう

「色香に」の「香に」、及び「咲らむ」の「ら」は汚損なるも推測。

90　　遅桜の賞翫

春去りて夏をさかりの桜花(さくらばな)世におくれたる人ぞ問ける

春が去って夏を盛りと咲く桜花を、季節がずれて世に遅れた人が尋ねて来たのだなあ

「世におくれたる」の「おく」は汚損成るも推測。

91　　花盛(はなざかり)の郭公(かっこう)

鶯の今を春日と花の枝にさへづる空に鳴ほとゝぎす

鶯が今を春の日と思って花の枝にさえずる空に鳴くのは、初夏のほとゝぎすである

92　　雪中の艱苦(かんく)

軒高く降積雪(ふりつむゆき)に人絶えて命と頼むやどのあたり火

軒高く降り積もる雪に人影もなく、命と頼むのは宿のあたり火だ

93　　炎夏の清涼

炎●●夏の最中も山風のはたへに透(とお)る袖の●けさ

炎？？夏の最中も山風が肌に透(とお)る袖の？けさ

越志百首に、

「いざこゝに涼みくらさん戸隠の杣の木蔭に暑さわすれて」

さあ、ここに涼んで暮らそう、戸隠の杉の木蔭に暑さを忘れて

94　　女の風俗

●●猿もゝひきを高ばきて男健(おたけ)びなせど女也けり

？？猿股を大層にはいて雄叫びをするが、やはり女であるよ

越志百首に、

「賤(しず)の女(め)の真柴刈日(かるひ)の出立(いでたち)はましらに似たる麻のもゝ引」

貧しい女が柴を刈る日の服装は猿に似た麻の股引だ

猿ももひきは猿股のことで一般に男性用だが、戸隠では女性用をいう。

95　　橿原(かしはら)の蕎麦の花

時ならぬ雪と見るまで山畑に名高き蕎麦の花は咲けり

時節外れの雪と見えるまで山畑に名高い蕎麦の花は咲いたことだ

歌題は越志百首より補う。

「雪と見るまで」の「見」は汚損なるも推測。

橿原はいまの戸隠の柏原。

96　　幣軸竹(へいじくだけ)の籠細工

年毎に蚕養(こがい)の□□いと長くたつきにあめる繭の竹籠

年ごとに蚕養(こがい)の□□たいそう長くなり、生計として編んでいる繭の竹籠

戸隠では幣軸竹は根曲がり竹のこと。戸隠では養蚕は出来ないが、繭の竹籠の供給地であった。

越志百首に、

「畏(かしこく)も神に幣捧(ささげる)る弊串(へいぐし)の竹もて作る蚕養籠(かいこかうかご)」

おそれおおくも神に捧げる弊串の竹でもって作る養蚕の籠よ

97　　鋤鉄柄の木取(きどり)男

里人の耕しすけに山の男が造りて出す鋤鍬のから●

里人の耕しすけに山の男が造って出す鋤鍬のから？

越志百首に、

「　　鋤鍬の柄の木取男

農業に日毎用ゆる鋤鍬の木品取男(とるおとこ)の手極(てぎわ)いさまし」

農業に毎日使う鋤鍬の材木を取る男の手際は勇ましいことだ

98　　飯縄山の飯砂

飯縄山岩根に蒸せる飯砂は神の恵の●●てにそ

飯綱山の岩の所で蒸した飯砂は神の恵の？？？？

越志百首に、
「名に尊き飯縄の山の飯砂は千年万年退転有けり」

名も尊い飯縄の山の飯砂は千年も万年もたつと減っていく

戦前までは確かに飯砂と称するものがあって食べたという。天狗の麦飯。

99　荒倉山の紅葉狩

維持(これもち)か昔しおほえて今も猶紅葉狩する荒倉の山

維持(これもち)の活躍した昔が思われて、今もなお紅葉狩をする荒倉の山

「紅葉狩する」の「す」は汚損あるが推測。

維茂が女に化けた鬼を退治する謡曲「紅葉狩」をふまえる。

100　大久保の一鳥居

飯綱原迷ふ旅人あはれ●●●孤(ひとり)立る大鳥居（かな）

飯綱原で迷う旅人は哀れだ？？？ひとつだけ立っている大鳥居だなあ

歌題は越志百首より補う。

越志百首に、
「名にしあふ我大神の一の木戸大久保の峯に立し鳥居は」

名のとおり我大神の一の木戸であることよ、大久保の峯に立つ鳥居は

101　大久保茶屋力餅

越えなつみ此一つ家にたどりつき行て越行く力つく餅

越えるのに苦労して此一軒家にたどりつき、行て越？？力のつく餅

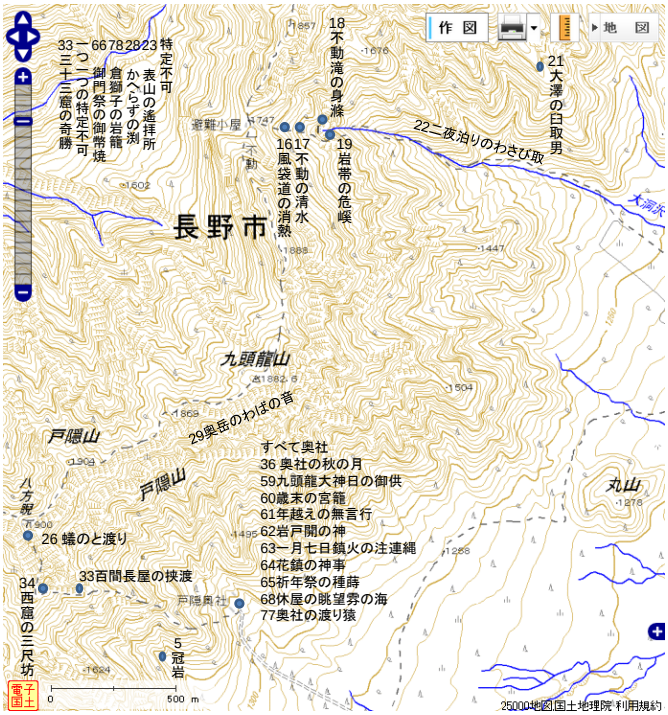
「越行く」の「行く」は汚損成るも推測。

力餅は今は実態が不明。『戸隠山紀行』には白砂糖をふりかけて出したとある。越志家の記録には江戸時代に檀家回りに力餅を持って行ったとあるというから乾いた餅か。もっともそれぞれであってもいい。

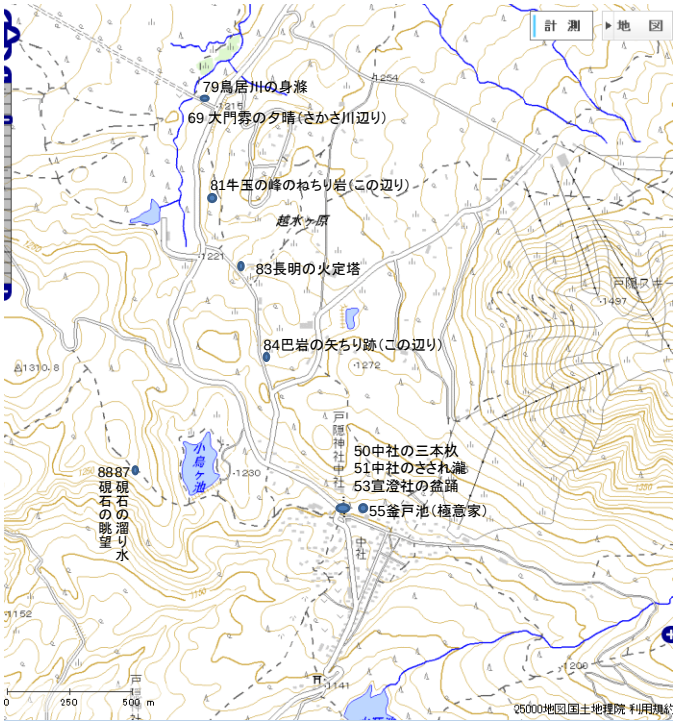
維時明治廿二年六月

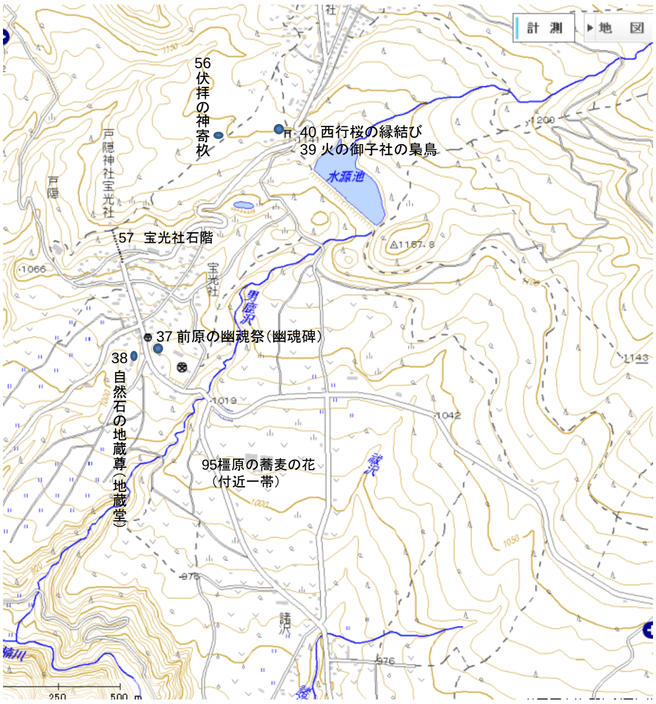
「戸隠百首」の釈文は、滝澤栄子が礎稿を作成し、八木輝夫と堀井謙一が協力し、二澤久昭氏の多大なご教示をいただいたものであります。

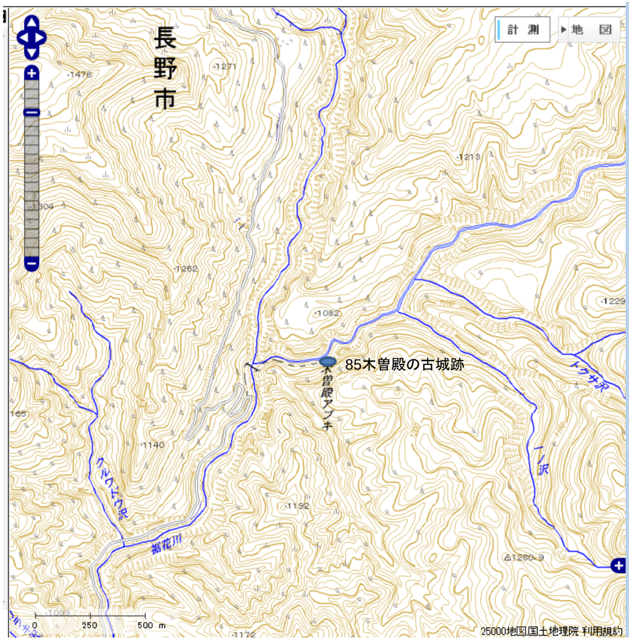
8 大門澤の夏後の雪
乙妻山
3 両界岩の山彦
4 禮拝石の昔し語
6 返照の狭霧
乙妻山
2 乙妻山の投の松
11 剱の峯の眺望
5 地蔵の頭
高妻山
1 高妻山の神鏡
14 仲秋の峰の雪
12 髯摺の攀登
24 眼鏡岩
五地蔵山
27 千丈の滝
15 大富邊の雨宿り


作 図
地 図
33 三十三窟の奇勝
一つ一つの特定不可
66 御門祭の御幣焼
78 倉獅子の岩籠
28 かへらずの渕
23 表山の遙拝所
特定不可
18 不動滝の身滌
21 大澤の臼取男
22 二夜泊りのわさび取
16 風袋道の消熱
17 不動の清水
19 岩帯の危嵯
避難小屋
長野市
九頭龍山
29 奥岳のわばの音
戸隠山
戸隠山
八方睨
26 蟻のと渡り
33 百間長屋の挟渡
34 西窟の三尺坊
5 冠岩
戸隠奥社
丸山
すべて奥社
36 奥社の秋の月
59 九頭龍大神日の御供
60 歳末の宮籠
61 年越えの無言行
62 岩戸開の神
63 一月七日鎮火の注連縄
64 花鎮の神事
65 祈年祭の種蒔
68 休屋の眺望雰の海
77 奥社の渡り猿
0
500 m
25000地図 国土地理院 利用規約

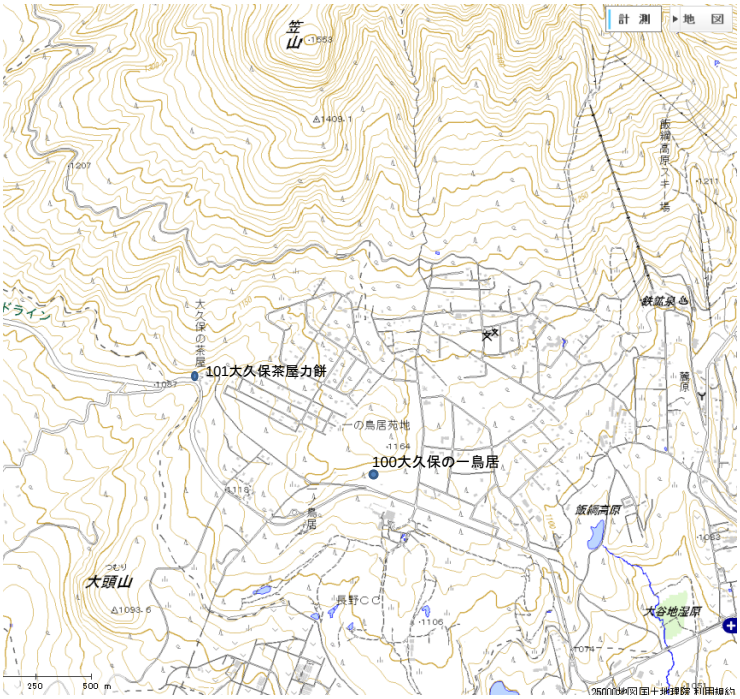
特定不可
45 大端の炭焼
86獅子岩の吼声

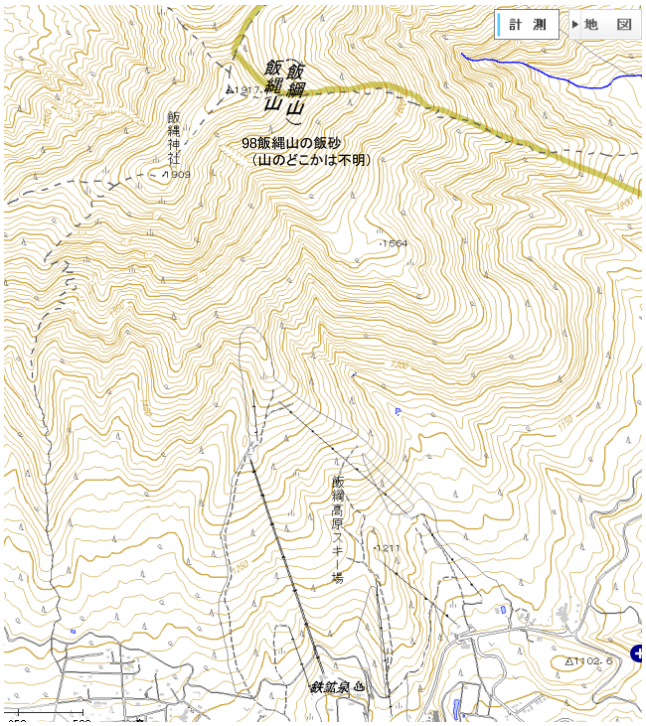



計 測
地 図
56伏拝の神寄枚
40 西行桜の縁結び
39 火の御子社の梟鳥
水源池
戸隠神社宝光社
57 宝光社石階
宝光社
男座沢
37 前原の幽魂祭（幽魂碑）
38自然石の地蔵尊（地蔵堂）
95檀原の蕎麦の花
（付近一帯）
250
500 m


計 測
地 図
長野市
85木曽殿の古城跡
木曽殿アブチ
250
500 m
25000地図国土地理院 利用規約

計 測
地 図
大滝
楠川
長野市
紅葉の岩屋
99荒倉山の紅葉狩（荒倉山）
釜岩
舟岩
宇和原
五十里沢
奈良尾
250
500 m
25000地図国土地理院 利用規約


計 測
地 図
笠山
飯綱高原スキー場
鉄鉱泉
大久保の茶屋
101大久保茶屋力餅
一の鳥居苑地
100大久保の一鳥居
飯綱高原
大頭山
長野CC
大谷地湿原
250
500 m
25000地図国土地理院 利用規約



参考文献

『戸隠山大権現縁起』（享保一二年・1727 年に顕光寺別当に就任した乗因著）

『信濃奇勝録』（天保五年・1834 年）

『善光寺道名所図会』（天保十四年・1843 年）

『戸隠山案内記』（明治三六年・1903 年）

『戸隠壮遊記』飯島花月（信濃毎日新聞明治 30 年 9 月 15 日から始まる九回連載）

『長野県町村誌』（明治十五年・1882 年調）

『戸隠神社御境内並付近図』（大正六年・1817 年）

『裏山参詣案内記』（明治以後。宮沢和穂氏蔵、県歴史館にマイクロあり）

『奇窟怪岳』（江見水蔭が「少年世界」に発表。明治四十年（1907 年）に『奇窟怪岳』として上梓。

『東遊記』後編一七九七年寛政九年橘南谿（『袖珍名著文庫』巻三四所収）

『戸隠山往来』辻家蔵、江戸期

『種ヶ池伝説と九頭竜権現記』昭和十三年渡邊一意